

昨今話題の佐賀県T市ツタヤ指定管理のブックカフェ図書館。出版界に無料貸本屋かと揶揄される図書館。迷走を煽るメディア。俯瞰した作家の記事から。



全国の公共図書館の貸出数は、この20年ではほぼ倍増した。一方、書籍の販売冊数はピーク時から約3億冊減少している。長引く不況や「描報はタダ」というネット文化の影響で、本は買うものではなく、タダで借りるものという声も聞かれるようになった。しかし、冊の本が読者に届くまでには、作者・出版社・書店等の莫大な労力が注がれ、その仕組みは無料で維持できない。本来、図書館は、長く読み継がれるべき本や、個人では購入しにくい高価な書籍を所蔵し、活字文化の基盤であるべきではないだろうか。「民間委託」で合理化を図る図書館の現状や、作家、出版社など当事者の声を紹介する。

佐賀県武雄市市民図書館が、水書に
この7月7日かえりま
20年をむかえ計担つて
23年前に設け合とを
考えてきたこ
お話ししたく思

■公共図書館とは

CCCが図書館運営に参入したのは、樋渡前武雄市長が代官山鳥屋書店に感激したことが始まりだった。書店と公共図書館の関係としては長い歴史を持つのが紀伊國屋書店である。同社の高井昌史代表取締役社長は、一九七一年に入社、一九七五年から栃木県宇都宮市の営業所長として赴任し、公共図書館の立ち上げに携わった。思い出深いのは栃木県立足利図書館の設立だという。館長とともに特色ある蔵書を模索し、フランス文学や英文学の全集など、洋書を充実させた。学者や研究者が足を運ぶような県の文化力を支えうる図書館になったと自負している。海外の公共図書館も多数視察し、公共図書館への思いは深い。

「公共図書館の原点を見つめなおすべき時期なのかもしれないね。公共のニーズに応えるのは図書館の使命かもしれないが、それだけではなく、よい本を収集し、次世代へつなげる役割を自覚するべきだと思います。公共図書館には資料の蓄積という責務があるのです。どんな蔵書構成にするのか、鑑識眼が問われますが、じつはそれ以上に難しいのは廃棄圖書の判断です。一度廃棄したら取り返せない。その地域にしかない資料もありますから職員は勉強しておかないとね」かつては小さな町の図書館でも住民たちの読書会や、作家

を招いての講演会なども開かれていたが、昨今はそんな光景も少なくなつたと残念がらる。
「今の公共図書館はコンピュータシステムにお金をかけすぎると思いますよ。大事なものはやはり本です。ベストセラーだからといって何冊もそろえる必要なんてありません。そこはやはり節度を持つべきです。それから貸出冊数を増やせばいいというのも、ただいただけませんね。一冊の本を時間をかけてじっくり読む人もいます、それは数字にはあらわれないでしょう」
では、よい図書館とはどういうものだろうか。

■伊万里市民図書館と図書館の未来

「じつにシンプルなものですよ。本を大事にして、人(利用者)と図書館員を大事にして、施設を大事にしている」
まさに、そんな図書館があると聞いて尋ねたのは、武雄市に隣接する伊万里市の伊万里市民図書館である。こちらにも各地からの視察が絶えないという。
伊万里市の人口は五万六八七九人(二〇一五年二月)、やはり減少傾向にある。面積は武雄市より広いが、人口密度も老年人口割合もふたつの市はほぼ同じだ。だが、図書館がめざすものは対照的といえるだろう。伊万里市民図書館の歴史をたどってみる。

あって、畳敷きの一室まであった。くつろぎコーナーでは老年の男性ふたりが囲碁を楽しんでいた。そこからは小さな庭がのぞめ、よく手入れされている植物が目が癒される。
一階の奥に「福祉喫茶あおぞら」があった。メニューは、うどん(三三〇円)、おにぎり二個(一五〇円)など。おにぎりは手作りのほかほかだった。コーヒーマ(二〇〇円)もあざりでは持参したお弁当を食べることもできる。
ずっと居続けたくなる図書館だった。それは、誰かに押し付けられたものではなく、自然に生まれ、育てられ、見守られている図書館だからなのかもしれない。起工式が行われた「めばえの日」は図書館の記念日となつて毎年ぜんざいがふるまわれ、数百人の市民がお祝いに駆けつけるほど親しまれている。数字を示すのはヤボだが、利用登録者は三万八七九人(二〇一四年四月)。市民の六八%に達する。

その伊万里市民図書館でも、二〇〇九年に「指定管理者制度」の導入が検討されたことがあったが、塚部芳和市長は導入しないと決断した。その理由を市長は「仮に指定管理者制度が導入されたら、市民の知る権利を保障する図書館の基本理念を遂行することができなくなるかという不安」とともに、「民間業者への丸投げだけはしたくないという一念」だという。なぜならば「伊万里市民図書館は、市民とともに蓄積された図書館能力を有して」いるからだ、と述べている。市民とともに築いてきた図書館なのだ、という自信のあらわれ

もともと伊万里市には市立図書館があったのだが、水書により公民館の一室に間借りすることになったまま年月が過ぎた。小学校単位にあった「母子の読書会」のメンバーが中心となって、一九八六年「図書館づくりをすすめる会」が発足。勉強会や講演会を開いたり、各地の図書館見学をしたりしていた。
一九九一年に図書館設置計画が立ち上がり、市民代表二十人を含む図書館建設懇話会が開かれ、用地決定や建設にも市民の声を反映させていくように要望書を提出。九三年には市民と行政がともに学び、対話する場として「図書館づくり伊万里塾」が八回開かれていた。

一九九四年二月二十六日、図書館起工式には市民二百人が参加。この日を「めばえの日」として、ぜんざいがふるまわれた。その年の秋、「ふるさと創生資金」の一部を使い図書と市民五人がアメリカ図書館見学のため旅立っていったのだ。その旅の成果も生かされ、一九九五年、市民図書館がオープン。図書館の目標を「伊万里をつくり、市民とともにぞだつ市民の図書館」と掲げた。「図書館づくりをすすめる会」は、図書館への協力と提言を続けていく「図書館フレンズいまり」に発展。今も熱心に活動中だ。二〇一四年十月、日本図書館協会から図書館に貢献した団体として感謝状が贈られている。
その図書館を見学した。

もあろう。

図書館とは誰のものか、何のためにあるのか、根本的なことを訴えているようにも思う。何より、塚部市長の言葉に心が揺さぶられるのは、市民の力を信頼しているからなのだ。今「地方消滅」が叫ばれている。図らずも隣り合わせの武雄市図書館と伊万里市民図書館は、それぞれにこの現状を象徴しているのかもしれない。人口が減り、産業も先細る地方で、劇薬を投じるのか、身の丈に合った道を歩むのか――。
ところで、さきごろスウェーデンの第二の都市、ヨーテボリに行く機会があり、市立図書館をのぞいた。人口約五〇万の都市である。

古い図書館をリニューアルしたばかりだった。歴史ある建物を活かしつつ、内部は見事に美しい。家具やインテリアデザインで定評のある国だが、カラフルで多様なデザインの書架や机、椅子が置かれていた。ひとりでパソコンに向かって調べものをしたり、若い父親が赤ちゃんと遊んだり、学生たちのグループが議論していたり、ゆったりとした椅子で読書に没頭するおじいさんがいたり――。それぞれ自分の家のようを使い、自分の家のように大事にしている感じがした。
スウェーデンは法律によって、すべてのコミュニティ(日本の市町村にあたる自治体・約二九〇)に図書館の設置が義務付けられているとともに、全土の図書館網が支えて資料提供などを行っている。ヨーテボリ市立図書館で人気の高いサービ

159 「民営化」の危険な民

すでに二十年近くをへた建物だが、その時間の経過が温もりを感じさせる。建物全体は複雑なつくりになっていて、それぞれの部屋がゆるやかに分かれている。窓から淡い陽の光が届く。エントランスを入ってすぐに子ども本の書架があり、「子どもデスク」の職員に話しかける子がいた。ひとりでじっくり本を読む子や、お母さんと一緒に机に座って何か描いている子もいる。館のカウンターは子どもデスクをふくめて三か所ある。
一般開架室。もちろんすべて手が届く高さの書架だ。書架には、分野に合った話題の人物やテーマの本を集めた企画コーナーが設けられている。この図書館員がとも本が好きでよく読んでいて、ということがわかる。驚いたのは、平凡社の「東洋文庫」がずらりとそろっていることだ。私がずっと探していたものもあって、市立図書館でこのレベルはすごい。岩波文庫もまとまってあり、棚を見ていると読み損ねていた古典を読まなければと思うのだった。

子ども開架室、ヤングコーナー、グループ学習室(予約制)、雑誌や新聞のコーナー、そして伊万里学研究室は伊万里関係の図書や焼物の文庫がそろる。二階の開架式書庫には年数のたった本や雑誌のバックナンバー、過去の佐賀新聞などがある。やや高い書架だが、それでも二段の踏み台に乗れば手が届く。
館内のあちこちにベンチやソファ、ひとり用の椅子が

スは、自分のルーツを知りたいという人への資料提供だ。教
会に保存されている文献なども探し出しているという。
スウェーデンの消費税率は二五%にもなる。高い税金を払っている以上、国民すべてが公平な住民サービスを受けるべきだという意識が高い。公共図書館は社会保障制度の一環として位置づけられているが、それは地域によって住民が得る情報や図書の質に差があるのは不平等だという考え方からだ。スウェーデンの国土は日本の一・二倍、人口は九六八万人だ。それでも高い技術力を誇り、芸術分野でも世界的に名高い。それには多くの要因があるのだろうが、そのひとつに公共図書館が基盤となつて人材を育ててきたこともあるのではないだろうか。実際、スウェーデン図書館協会の調査によれば、八五%の人が図書館は国民にとって重要な施設だと回答しており、七〇%が図書館に信頼を寄せている。そのことはヨーテボリ市立図書館の温かい雰囲気からも感じることができた。
公共図書館は、その国、地域、住民たちの姿を映し出す鏡のようなものかもしれない。その土地でどんなふう生きてきたのか、どんな未来を思い描いているのか。
公共図書館は、今を生きる私たちとともにいる「生き物」でもある。自分たちの手で変えていくことだって、できるはずだ。